

赤い船のお客

小川未明

青空文庫

ある、うららかな日のことでありました。

二郎は、友だちもなく、ひとり往来おうらいを歩いていました。

この道みちを、おりおり、いろいろなふうをした旅人たびびとが通ります。

かれ
彼はさも珍めずらしそうに、それらの人たちを見送みおくつたのであります。

二郎は、こうして街道かいどうを歩あるいてゆく知らぬ人ひとみを見るのが好きでした。

さまざまことを空想くうそうしたり、考えたりしていると、独りでいてもそんなにさびしい

とは思おもわなかつたからです。

あたたかの風かぜが、どこからともなく吹いてくると、乾いた白い往来おうらいの上には、ほこりが立ちました。

まだ、おそ咲きのさくらの花はなが、こんもりと、黒ずんだ森くろもりの間あいだから見えるのも、いずれも、なつかしいやるせないような気持ちきもちがしたのであります。

その日も、二郎は独りあてもなく、街道かいどうを歩あるいていました。

くるまおと車の音きが、あちらへ夢ゆめのように消えてゆきます。

くすりう薬はな売りかなぞのように、箱はこをふろしきで包んで負おとこつた男おとこが、下したを向むかいて過ぎすていつて

からは、だれも通りませんでした。

二郎は、寺の前の小さな橋のわきに立つて、浅い流れのきらきらと日の光に照らされて、かがやきながら流れているのを、ぼんやりとながめしていました。

彼はほんとうに、このときはさびしいと思つていたのであります。

ちょうど、このとき、奥深い寺の境内から、とぼとぼとおじいさんがつえをついて歩いて出てきました。

おじいさんは、白いひげをはやしていました。

二郎は、そのおじいさんを見ていましたと、おじいさんは、二郎のわきへ近づいて、ゆき過ぎようとして二郎の頭をなでてくれました。

「いい子だな、ひとりでさびしいだろう。」と、おじいさんはいいました。

二郎は黙つて、おじいさんの顔を見ていました。

おじいさんは、たものの中から、短い笛を取り出しました。

「この笛を坊やにやるから、あちらの丘へいって吹いてごらん。これはいい音が出るよ。」

といいました。

二郎はおじいさんから、その笛をもらいました。

おじいさんの顔は、いつも笑つて いる ように 柔和に見えました。

おじいさんは、あちらへつえをつきながら いつてしましました。
二郎はその笛を持つて、あちらの砂山にゆきました。

このあたりは海 岸で、丘には木というものがなかつたのです。
砂の山が、うねうねとつづいていました。

そして、暖かな日なので、陽炎が立つていました。

沖の方を見ますと、青い青い海が笑つていました。

砂山の下には、波打ちぎわに岩があつて、波のまにまにぬれて、

そして、翼の白い海鳥が飛んでいました。

笛には、いくつかの小さな穴があいています。

その一つ一つの穴から、吹くと、ちがつた音が出ました。

笛は短い赤と青とに、その色が塗り分けてありました。

大きな穴が一つ、小さな同じような穴が五つあいていました。

二郎がそれを吹きますと、なんともいうことのできないやさしい、

いい音色が流れ出で

のであります。

いい音色は、沖の方へ流れてゆきました。

また、うねうねとつづいた灰色の山を越してゆきました。

そして、沖の方へいつた音色は、波の上をただよつたのです。

また、砂山の上を越していつた音色は、あちらの空に、円くうずくまつていた、こはく色の雲のあるところまでゆくように思われました。

海はますます穏やかに見えたのです。

そして日の光は、ますますうららかに輝いたのでした。

あくる日もまた、二郎は砂山の上へやつてきました。

そして、熱心に笛を吹いていますと、一つ一つの穴から出るものは、影も形もない音ではなくて、たしかに、いろいろ奇妙な姿をした、一人一人の人間であるように思われました。

れました。

二郎は、目をつぶつて笛を吹いていますと、それらの人たちが二郎の身のまわりを取り

まいて、笑つたり、話をしたりしているように思われました。

二郎はふいに目を開いて、その人たちがどんなようすをしたり顔つきをしているか、自分が、たいてい想像したとおりであるかと、見定めようといたしました。

そして目を開けますと、なにもかも消えてしまつて、ただ砂山に、日がぽかぽかとあたつているばかりがありました。

このとき、二郎は、ふと沖の方を見ますと、そこにはわき出たように、赤い船が青い海の波間に浮かんでいたのであります。

二郎は、お伽話にでもあるように、美しい船だと思いました。

そして、どこからこんな船が、このさびしい港にやつてきたのだろう……と、それを、不思議に思いました。

二郎は、また、砂山の下を、顔まで半分隠れそうに、帽子を目深にかぶつて、洋服を着た人が、歩いているのを見ました。

そして、しばらくすると、赤い船の姿はうすれ、洋服を着た人の姿もうすれてしましました。

二郎は、まるで夢を見て いるような心地がされたのでした。

ふたたび目をつぶつて笛を吹きますと、一人一人、異様な形をした人間が自分の身のまわりに飛び出して、笑つたり跳ねたり、話をはじめるのでした。
かれめひら
彼はふいに目を開きました。

そして、沖の方をながめますと、赤い船がいつそつはつきりとして、青い青い、波の間に浮き出でているのでした。

また、笛の穴の中から飛びだして、幻の中に笑つたり跳ねたりした、異様な、帽子をまぶかにかぶつた洋服を着た男も、ほんとうに、砂山の下をてくてくと歩いているのでした。

二郎は目を開けながら、自分は、夢を見ているのではないかと思つたのでした。
「不思議な笛だ。」と、彼は、手に持つておじいさんからもらつた笛をながめたので

す。

砂山の上に、仰向けになつて臥ながら、彼は、笛を吹いてみました。

吹けば吹くほど、いい音色がでて、不思議ないろいろな幻が目に見えたのであります。

二郎はまた、起き上がりました。

そして、笛の穴をのぞきながら、「この穴の中に、なにか小さな魔物でもすんでいるのではないか?」と思いました。

このとき、海の方から、ため息をつくように、軽いあたたかな風が、吹いてきました。
「ほんとうに、不思議な笛だ。」

一郎は、しみじみと、この短い青と赤に塗り分けられた一本の笛に、見入っていました。その中に彼は、棒きれを持つてきて、笛にあいている穴を、一つ一つ、つついてみていました。

いくら棒きれでもつて穴をつついても、その中からどんな魔物も飛び出しませんでした。また、泣き声をたてるものもありませんでした。

笛の中は、ただ一本の空洞の竹にしかすぎませんでした。

それでも一郎は、なお思いあきらめることができなかつたのです。

やはり、一つ一つ無理に、穴をつついているうちに、その笛は、ひびがはいつてしまいました。

一郎は、もう一度いい音色を聞こうと思つて、その笛を唇にあてて吹いてみました。

しかし、笛はもう、なんの音もたてずに、まったく役にたたなくなつてしまつたのです。海や砂山や、空にかがやいている日の光には、すこしの変りがなかつたけれど、天て地は急におし黙つてしまつて、なにもかも、おしのことくに見られたのです。

そして、赤い船の影は、波間にうすれて、見えたり、消えたりしています。洋服を着た人は、どこへいつたか、もうおらなかつたのであります。

二郎は、笛をすてて家に帰りました。

そしてその夜は、後悔しました。

あの大事な笛を割つてしまつて、とりかえしがつかなかつたからです。

あくる日の昼ごろ、二郎は砂山へいつて、昨日笛を吹いたところにきてみました。

するとそこには、いろいろの草が、一夜のうちに花を開いていたのです。

赤い花、白い花、紫の花、青い花、そして黄色な花もありました。

夕空に輝く星のように、また、海から上がつたさまざまの貝がらのようには、それらの花は美しく咲いていました。

二郎は、ぼんやりと立つてながめていますと、その中の、いちばん茎の長い赤い花は、どこかで見た女の人の思い出さずにはいられませんでした。

「どこで、ちようどこの花のような人を見たであろうか……。」と、二郎はしばらく考えていきました。

彼は、やがてそれを思い出しました。

それは昨日の晩方、港の方へ歩いてゆくと、町の中で脊のすらりつとした、ほおの色の美しい、りつぱな着物を着た旅の女人を見たのでした。

二郎は、足もとに咲いている赤い花が、風になよなよと吹かれている姿が、その人のようすそのままであつたことを思つたのです。

二郎は沖の方を見ると、赤い船が、今日も停まつていました。

やはり、夢ではなかつたことがわかりました。

晩方まで、花の咲いている丘の上で、彼は空想に時をすごしました。

そして、海の面が入り日の炎に彩られて、静かに暮れていつた時分に、彼は町の方へ帰つてゆきました。

ある果物屋の前で、ふたたび昨日の美しい女人の人に出あいました。

彼は思わず顔を赤らめて、その人を見送りますと、

「このごろ、港にはいつてきた、赤い船のお客さまだよ。」と、町の女房たちが、うわざしているのをきいたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 4」講談社

1977（昭和52）年2月10日第1刷発行

1977（昭和52）年C第2刷発行

初出：「童話」

1924（大正13）年5月

※表題は底本では、「赤《あか》い船《ふね》のお客《きゃく》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：富田倫生

2012年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの塙やんです。

赤い船のお客

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>